

紙上講演会



4月18日に開催を予定しておりました絵本編集者・筒井大介さんの記念講演会は、今般の事情により、中止となりました。代わりに、筒井さんが「猫絵本の作り方 編集の現場から」を書き下ろしてくださりました。紙上演説会というわけですね。じっくり読もう。

「猫絵本の作り方 編集の現場から」
筒井大介

新型コロナウイルス感染拡大の影響でイベントを中止したのですが、せっかくなので、紙上演説会ということでご機嫌を伺います。初めまして、絵本編集者の筒井大介と申します。今展の作家のお声がけ、そして図録の編集をお手伝いした関係で呼びびいただきました。出品作の中では『ネコツメのよる』『えとえとがっせん』の編集を担当しています。

担当した右記二作のを中心にお話ししたいと思っています。まずは『ネコツメのよる』について。

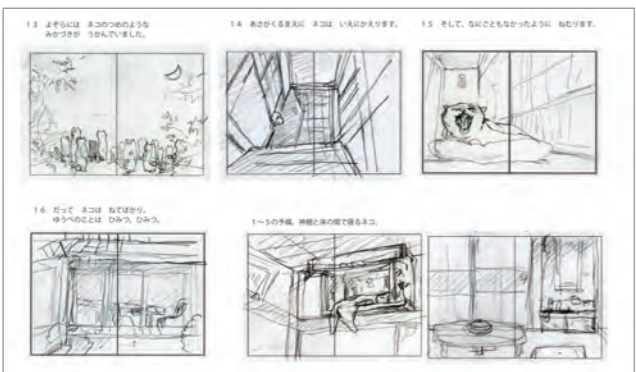
『ネコツメのよる』（町田尚子）

町田さんとは、『おばけによろぼう』という絵本でご一緒しました。町田さん、手がけ

この絵本のオリジナリティを生んでいるのです。

町田さんの絵本で印象的なのはまずリアルな絵柄です。ひと昔前なら、場合によっては怖いと言われて敬遠されることもあったと思います。企画が通りづらかったりとか。この表紙すらも、もしかしたらNGだったかもしれない。僕は2002年から絵本の編集をしています。きちんと検証してなくて個人の感覚ですが、ちよつど僕が編集者になったころは過剰に「怖い」というのが敬遠されていた気がします。もつと前、60年代70年代は、怖い絵、激しい絵、強い絵がそこまで敬遠されてなかったんじゃないかと思いますが、その後、過剰に避けられた時代はあったんじゃないかと考えています。

現在は、岩崎書店の怪談えほんシリーズをはじめとして、怖い絵というのが絵本においてもかなり受け入れられるようになってます。それにはおそらく3・11の震災が関係していると思っっています。

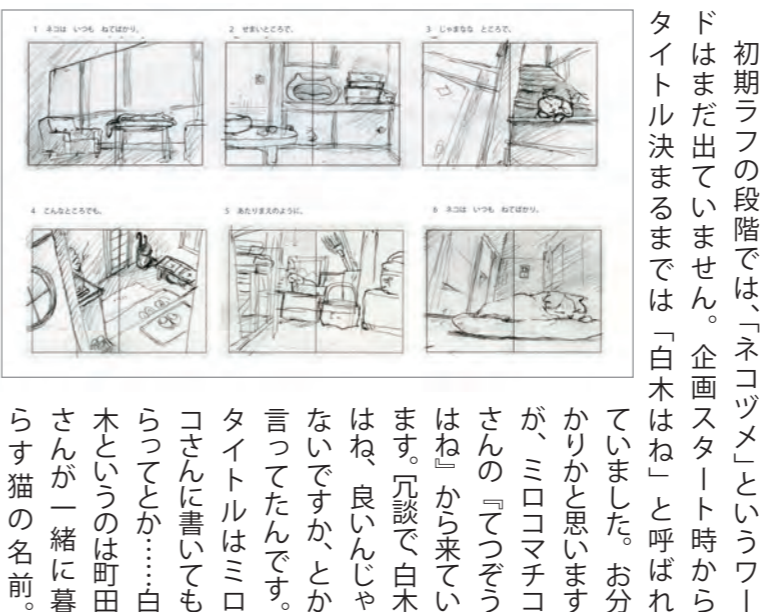


あれ以降、生命力を感じさせるもの、もしくは死をテーマにしたものが増えた、というかより求められるようになった印象があります。先ほど名前を出したミロコマチコさんは震災以降の作家の代表的な一人だと思っいます。ミロコさんの絵も、僕が編集者になった頃に新



2016年 WAVE 出版

思い切り描いたら良いんじゃないですか」と言っって始まった絵本です。

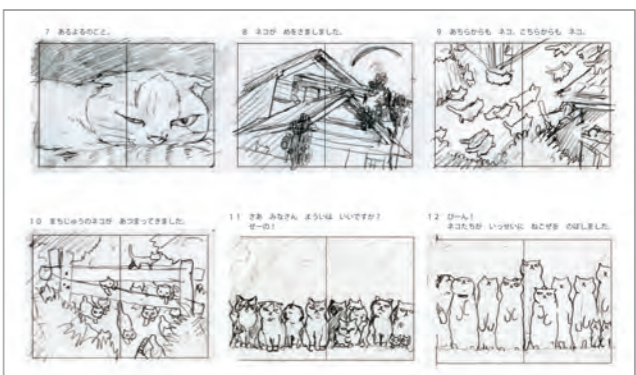


初期ラフの段階では、「ネコツメ」というワードはまだ出ていません。企画スタート時からタイトル決まるまでは「白木はね」と呼ばれていました。お分りかかと思っますが、ミロコマチコさんの『つぞうはね』から来ています。冗談で白木はね、良いんじゃないですか、と言っってたんです。タイトルはミロコさんに書いてもらっつととか……白木というのは町田さんが一緒に暮らす猫の名前。

る絵本にいつも無理やり猫を登場させるので、「そんなに猫が描きたいなら、

ほんと、この表紙絵そのまんまなんです。

初期段階ではあくまで、「猫の爪のような三日月」であつて、ネコツメではないんです。内容的にも月を見に行くところが完全にメインでもなく、猫はいつでもどこでも寝ている、でもそんな猫にも秘密があつてね、的な雰囲気です。



これ、猫の爪みみたいな三日月と実際の猫の爪の形、というのでは随分印象が違います。リアルなタッチで描かれる世界に、ほんの少しファンタジー感が加わることで、より想像力を刺激するものになりました。リアルとファンタジーのバランスが非常に良い。

猫絵本の基本的な作り方は、まず猫あるあるなんです。猫と暮らしている人が「それ、猫やるよね、猫つてそうだよね」というポイントを色々な角度から抽出する。しかしもちろんあるあるだけではダメで、そこから如何にイメージを広げられるか、ということが重要なんです。今回の絵本でも、猫はいつも寝ているとか、猫の仕草とか、猫の集会だけでは弱かつた。そこに「ネコツメ」というアイデアが出てきたところが、

も知れませんが。

『ネコツメのよる』、構成はいたってシンプルです。家の中の場面をしばらくやって、出かけて、集まつて帰つてくる。これは平面的な場面の連なりでやってしまうと、15場面持たない可能性が有ります。あきてしまう。それを、次々にページを捲らせるようになってるのは、この映像的な画面の効果だと思っいます。

海外の絵本では見かけますが、『かようびのよる』など、日本の絵本でここまで映像的な演出がされている絵本はそんなに多くないのではないのと思っいます。しかしこれからこういうアプローチの絵本は増えていくのではと思っっています。技術を押し出した、細密な絵が求められるようになってると思っうので、同時にそれを活かすための映像的なアプローチというのは増えるかと。数ある猫絵本の中で、『ネコツメのよる』をなが現代の絵本たらしめているかというのはこの映像的なアプローチだと思っっています。

『えとえとがっせん』（石黒垂矢子）



2016年 WAVE 出版

さて、次は『えとえとがっせん』について。猫が主役ではなく、いわゆる「猫絵本」というものではないのかもしれないが、絵本の中に居る存在の仕方が非常に猫らしい、という点で選ん

でいただいたのだと思っています。

『えとえとがっせん』のキーワードは伝統のアップデートでしょうか。石黒さんは、日本の絵巻物だったり、浮世絵などから影響を受けて、自分が摂取してきた漫画やアニメ、ホラー映画やカンフー映画などのカルチャーの要素を取り込んで伝統的な表現を現代版にアップデートしている作家です。「てんまる」「とんいち」という二匹の猫と暮らしていて、絵本にもよく登場します。

「少しかけ絵本のきつかけのお話をしましよるか。石黒さんとお仕事したいと思った時に、連絡するにあたって「何か絵本やりましよう」だけじゃだめだよな、と思い、色々考えたのでした。最初に依頼した時のメールを検索したら、2014年の8月でしたが、当時急激に人気が出て来ていて、絵本はおそらく順番待ちになるだろうと。なので何か具体的なアイデアを提案しようと思って色々調べた中で、見つけたのが元ネタの十二類絵巻でした。これはびったりじゃないかと提案したところ「十二支は好きで描きたいモチーフなんです」とのこと、そこからはトントン拍子に進みました。

絵巻物を元ネタとはするけど、それはあくまで絵本のきつかけであって、忠実に作るつもりはありませんでした。結構かわいそうなお話です。ばかばかしく、笑えて、かっこいい絵本にしたいというのは最初からありました。初回打ち合わせで大まかな方向性が決まり、二度目にほぼ流れも決まった記憶がありません。

石黒さんは迫力満点のかっこいい絵と、すぐくゆるいラフな漫画的な絵（『てんまると

作るにあたり、元ネタの絵巻をほとんど無視しますが、そのエッセンスも残しておきたいと色々考えてもいるのです。それが例えばラップバトルの場面。これ、単なる思いつきで入れているのではなく、元の絵巻で十二支たちの歌合があるのです。決められたお題で和歌を詠んでその出来を競うんですね。でもその歌合を絵本でそのままやってもきつと退屈です。あくまでも現代の感覚で楽しめるエンターテイメントにしたかったので、歌合はやめようと。最初はただ省いただけでした。でもせつかくなので、そのエッセンスは入れておきたいという気持ちもあり、今それをやるなら何だろう、と考えて思いついたのがラップのフリースタイルでした。ですので、声を出して読んでいただくかわかりませんが、このくだりは一応韻を踏んでいます。

ちなみに元の絵巻では歌合の審判が鹿。それを羨んだため自分がにも審判をさせてほしいと十二支に頼んだけど散々バカにされて追い払われ、それに腹を立てて仲間を集めて十二支に戦いを挑むのが十二類絵巻です。最終的には負けてしまい、ためきは出家してしまうのですが、絵本ではためきを、山のけものたちを勝たせたい、と思いましたが、あのえらそうな、鼻持ちならん奴らを凹ませてやりたい、そういう気持ちがあったのです。絵本としてもその方が面白いです。

この絵本、見所は色々ありますが、個人的に一番良いと思うポイントは思いきりふげけながら、権威、権力をコケにしているという点です。えらそうな十二支たちをへこませた上で（しかも、あんな技でボスをやっつけてしまいます。なんたる屈辱……）

家族絵日記』みたいなもの）を両方描かれるのですが、その両極端を画面に同居させたいと思えました。それがまずこの絵本のポイントですね。石黒さんの絵本は何冊か出てますが、それをここまで意識的にやっているのはこれだけじゃないかと。コントラストがあればあるほど面白いと思ったので、お山のけものたちはゆるく、十二支はかっこよく、変身したためきと辰が格闘する場面は一枚絵の時のように大迫力ということになりました。さらにこの格闘シーンでは、めちゃくちゃかっこよく描かれた画面の中に、線だけで簡略化されて描かれたゆるいタッチのお山のけものたちが同居しています。しかもネームも「ふあいとーごーごー」とか、とにかくゆるい。一応仲間が闘ってるんやから、しかも自分たちの身体の一部も提供したるんやから、もう少し緊張感を持ってくれと言いたくなりますが、このコントラストが結果的に絵本のばかばかしい面白さを増幅させています。格闘シーンの緊張感を、端っこに描かれたゆるいタッチのけものたちが和らげている。そうすることで笑いが生まれる。

元ネタの絵巻はきつと、当時の漫画的な存在だったのではと思うので、かしまつて、真面目な硬い感じで絵本化すると、それはもう別物になってしまいます。「絵本」というとどうしてもブレイキがかかってしまう人もいますが、石黒さんにはとにかく全力でふざけてもらいました。なので、この絵本の中には、少年漫画を通過した人たちなら誰もが嬉しくなる要素が散りばめられています。そういう意味でも、ふざけてはいますが、実はかなり正統的な伝統のアップデートではないかと思っています。

お前らが新たに十二支になれと言われて断るんです。最高ですよ。

この絵本はただただばかばかしく楽しいものです。教訓、メッセージ、ありません。ただただ、楽しんで欲しい。そう思っ作りました。でも、結果的に、このお山のけものたち、「ドンたぬきとワイルドアニマルズ」のスタンスは現代においてとても痛快に感じます。権威をかさにきて偉そうにするやつという言葉となんて聞かなくても良い。いやだと思ったら全力で抗う。その上で自分はその権力をにぎらず、自由でいる。絵本を読んで笑いながら、そんなことも感じてもらえたら嬉しいですね。

このひたすらバカバカしくて面白い絵本が、そういうメッセージを持ちうる世の中というのは決して良い世の中ではないとも思いますが、こんな世界をなんとか生きていくヒントがあるのではと。

ひとくちに「猫絵本」といっても、例えば前者は猫のミステリアスな雰囲気を手く表現していますし、後者には猫の「ちゃっかり感」がよく出ていると思います。今展に出ている絵本を見てみると、猫の魅力の多様さ、深さがよくわかると思います。猫と暮らしている人は「そうそう！」と自分の猫を思い出し、そうでない人は原画を見て絵本を読むうちに、猫の魅力にとらえられ、いつのまにか猫と暮らしたくなっていることでしょう。

と、ここまで書いて、全く「猫絵本」として語っていなかったということに気づきました。という訳で無理やりやってみましょうか。まずはやはり存在感と振る舞いでしょか。なんというか、ちゃっかりしてるんですよ。最初の飲み会の場面やラップの場面にも顕著ですが、目立つ位置どりしてきたり、前に出てきたりする。猫と暮らしてみるとわかりませんが、とにかくアピールしてくるというか、仕事の書類の上に寝たり、パソコンの前に立ちただかったりしてきます。構って欲しかったり、仲間に入りたかったり、目立ちたかったり。猫は結構さりげなさを装いつつ存在感を出してきます。そのくせ、逃げ足は早かったり、失敗したらしれっと知らんぷりしてたりするので。例えば、辰が「にげるならいまだぞ」という場面の猫の表情、ここにも猫のしれっと感がよく表れていると思います。

あと、猫を飼うと、作家は必ずといっていいほど作品に猫を登場させるようになります。僕も猫と暮らしているのだからですが、どんな振る舞い、行動も面白くて目が離せないですね。そしてなにより圧倒的にかわいい。「最近みんな猫を描きますよね」等、懐疑的な発言をする作家でも猫と暮らし始めるとついつい描いてしまう。そういう魅力が猫にはあります。『えとえとがっせん』に登場する猫は石黒さんちの「てんまる」がモデルですが、他の絵本でも必ずといっていいほど、てんまる、とんいちが登場します。猫と暮らした時点で猫に支配されてしまい、その影響下で作品を作るので、何を描いても、猫が主役でなくとも、潜在的な猫絵本になってしまうとも言えるかも知れません。

筒井さんへの質問を受け付けます！

- 方法は2つ。
- ①その場で書いて、展示会を出たところにある特製ポストに入れる（紙は置いてあります）。
 - ②おうちに帰ってから、美術館のこのメールアドレスまで送る。
- アドレス：bijyutsu@city.takamatsu.lg.jp

筒井さんからの答えは、筒井さんのツイッターアカウント（#ニャー展）、青幻舎プロモーションツイッターで5月下旬に予定しています。

筒井さん twitter：@dtsutsu11
青幻舎プロモーション twitter：seigensha_pro



プロフィール

筒井大介
1978年大阪府生まれ。フリーの絵本編集者。担当した絵本に『ネコツメのよる』（町田尚子）、『えとえとがっせん』（石黒亜矢子）、『みんな』（きくちちき）、『りきしのほし』（加藤休三）『オレときいろ』（ミロコマチコ）など多数。編著に『あの日からの或る日の絵のことは 3.11 と子どもの本の作家たち』がある。水曜えほん塾、nowaki 絵本ワークショップを主宰。